vol.16 中野香織

ドルチェを待ちながら

久しぶりに会う友人との会話も落ち着き、ちょっと話に間が空くとき。
「こんな話知ってる?」というテーブルトークがあれば、もうひと盛り上がり。
ドルチェを待つ時間も、もっと楽しくなる。

撮影／青木倫紀　スタイリスト／橋本早苗

チューリップはターバン、グラジオラスは剣

最初に名づけた人の見立て力には、しばしばうなる。トルコからヨーロッパにやってきた、幾重にも花びらが巻かれたような花を見て、「ターバン(turban)に似ている」と思った人がいた。ゆえにこれは「チューリップ(tulip)」と名づけられた。また、葉っぱが小さな剣(gladius)のようだと見立てられた花は、「グラジオラス(gladiolus)」と命名された。ラッセル・クロウが一躍有名にした剣闘士グラディエーター(gladiator)は、グラジオラスとはコトバ上の親戚にあたる。「○○に似ているので、○○にちなんで命名」と半ばムリヤリ類似が発見されることで名が与えられたものは、少なくない。チューリップもグラジオラスも、言われてみればターバンや剣に見えないこともなく、名の由来はまあ納得できる。

しかるに、たとえば「カナッペ(canape)」はどうか。オードブルの華、カナッペという名も、実は、「似ている!」と見立てられたあるモノに由来する。しかも一口サイズのカナッペとは似ても似つかぬ大きさの、巨大なあるモノに。

天蓋つきベッドの、天蓋(canopy)である。なぜどこが似ているのか?

クラッカーやパンの部分を寝台、パテやキャビアやフォアグラといった具を天蓋および周辺の装飾、と見立てると、「似ている!」と見えるようなのである。

ついでながら天蓋canopyは蚊帳を意味するcanopeという中世英語に由来する。カナッペの先祖が蚊帳だった、と知るのはやや複雑な気分であるが。

さて。「台の上に華やかなフードがこんもり」という一口料理から西洋人がピンと連想した天蓋ベッド。日本ではひらひらカーテンがそれこそ蚊帳のようにつるされた「お姫様ベッド」がひそかにブームになったようだが、あのひらひらとカナッペは結びつきようがない。立食パーティーの華たるカナッペと強力に連想が結びつくだけの天蓋ベッドって、どのようなものだったのか?

形状的には、四柱式寝台(Four poster bed)とも呼ばれるように、ベッドの角4ヵ所に柱が立ち、その上を木の天板が覆う。寝台の周囲4平面は、すべてカーテンで覆うことが可能になり、その結果、ベッドそのものを「小部屋」にすることもできる。英国のカントリーハウス、マナーハウスには、巨大で荘厳なこの種のベッドが、広大な部屋のどまんなかに、主役顔で置いてあることが多い。

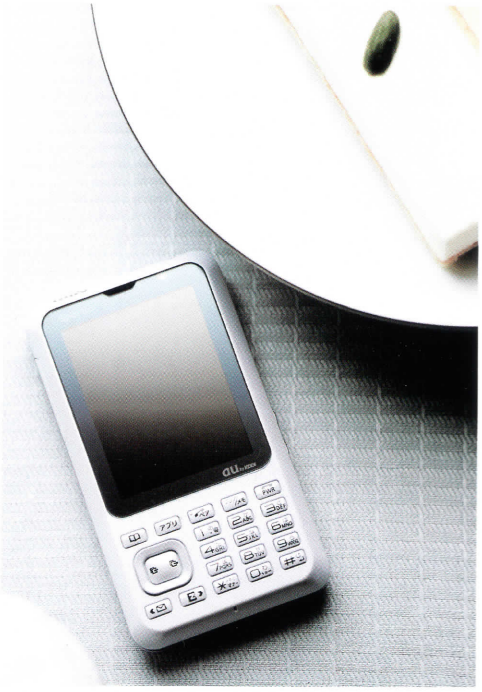
現在、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館が所蔵する「ウェアのグレートベッド(Great Bed of Ware)」は、1590年から1600年ぐらいに作られたもので、高さ2メートル半、幅3メートル強、奥行き3メートル半近くという、文字通りグレートなベッドである。ウェアという町の宿屋で目玉ベッドとして働いてきたらしいが、泊まった人の名前や落書きなんぞが、彫刻を施された太い柱に刻まれている。黄色と朱色のカーテンが重厚感に華を添える。これぞ、こんもり飾られた、祝祭的なカナッペのイメージ。

それにしても、いったい何のためにこんなややこしいベッドになったのか?

語源がほのめかすように、蚊よけの意味合いもあったろう。が、まだ暖炉などが発達していなかった時代に、ベッドの下に熱した石炭や煉瓦を入れた壺などをひそませて温かさを保った……というのが表向きの大きな理由のようである。

もちろん、カーテンで覆ってしまえば完全な小部屋になる。そこで何をするかはベッドの主しだい。たとえば「せむしのブ男」コンプレックスをバネに陰謀めぐらし王になったリチャード3世が1485年に「イノシシのアタマ(Boar's Head)」という宿屋で「戻らぬ人」となる直前に過ごした天蓋ベッドでは、後世、寝台の二重底から大量の金貨が発見された。一人で金貨を数えるのもアリ。

現代では、秘めやかな空間を連想させるためか、天蓋ベッドはエロチックな気分をかきたてる。存在そのものが愛のアペタイザーのようなもの。塩味強めのカナッペもまたアペタイザーという役割を果たしていたのでした。



中野香織
KAORI NAKANO
東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。著書に『着るものがない!』『モードの方程式』(ともに新潮社)など。4月より明治大学で特任教授としてファッションを講じる。